



藤野 敦子 FUJINO Atsuko

京都産業大学 経済学部 教授
専門分野：労働経済学、人口・家族問題

略歴

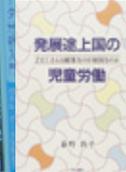
1990年大阪大学経済学部卒。神戸市役所勤務後、大阪大学大学院経済学研究科前期課程に入学。経済学の修士を取った後、後期課程に入学。後期課程在学中にパリに留学。帰国後、専業主婦に。
2001年、二人の子どもの育児をしながら、大学院の後期課程に。2003年、兵庫県家庭問題研究所研究員。2004年に博士（経済学）を取得後、京都産業大学経済学部に着任。2009-2010年にパリ西ナンテール・ラデファンス大学社会学部客員研究員。

愛は一母の愛さえも一とても不安定なものであるが、どんな愛も日々築かれるものである。

主な著書

不思議フランス 魅惑の謎
2014年 春風社(左)

発展途上国の児童労働
1997年 明石書店(右)



My Hobby

ピアノとパイプオルガンです。ヨーロッパの駅構内で音楽を奏でること。度胸がつきます。



研究テーマ

人々の「働く場」と「家庭」とで生じる様々な社会問題の研究をしています。

研究者になりたての頃は、「発展途上国の児童労働と高出生率との関係」を研究していました。その後は、先進国の人口や労働の問題にシフトしていきました。最近、ヨーロッパの人口、雇用、家族に関する政策の研究をしています。特に、「なぜフランスは近年出生率が回復したのか」、「男女共同参画や仕事と家庭の両立はどのように実現されてきたのか」などに関心を持ち研究を進めています。これらの研究成果を用いて日本の少子化・雇用問題などに対する政策提言を積極的に行っています。

研究の道へ進んだきっかけ

私は、きっとひねくれ者だと思います。人々が常識のごとく信じていることに対して、「うそ?ほんと?」と常に疑問を持って生

きてきました。それを突きつめようとしているといつのまにか研究の道に入っていました。はじめは、「発展途上国では、女性が無知だから、子だくさんになっている」と一般的に言われていたことに対して、「そんなことあるわけない」と思いました。私は「女性は子どもが必要だと合理的に判断しているに違いない」と思ったのです。それを私は実証することができ、本を執筆することになりました。今も人々が常識だと思っていることの「うそ」を暴くことが研究者の仕事だと思い、頑張っています。

研究者になってよかったと思うこと

外国に知り合いがたくさんできたことです(特にフランスにおいて)。私はフランス人に「フランス人女性よりもフランス人女性っぽい」と言われたことがあります。これは、ほめ言葉なのでしょう? そうではないのでしょうか? それはみなさんの想像にお任せいたします。

座右の銘

愛は一母の愛さえも一とても不安定なものであるが、どんな愛も日々築かれるものである。

エリザベート・バダンテール

研究とプライベートの両立で工夫していること

自分らしく生きることに徹し、無理はしないことを心がけています。また、パートナーや家族とその日あったことをたくさん話しするようにしています。パートナーはフランス人とスペイン人のミックスで、話が研究のヒントになることがあります。

未来の研究者へ一言

私の場合、日常生活の中の気づきが研究になっているし、逆に研究したことが日常生活に生かされています。また、一時的に研究から離れ育児に専念していた時期がありますが、そのことも後の研究に生かされています。女性はライフイベン

トに影響されやすく、研究業績などが少なくなる時期もあるのですが、だからといって研究者になることをあきらめないでほしいです。今は、研究サポートや両立しやすい環境も整備されてきており、随分よくなりました。

ところでSchool(学び、学校)の語源は、古代ギリシャ語「スコレ」でこれはもともと「余暇とかレジャー」を意味していたそうです。つまり研究活動は、仕事というよりは、知の探究をする自由な活動のことであり、人生を豊かにする時間だといえるのではないのでしょうか。

